

## 水害体験

24期 徳田完二

どういう巡り合わせか、私は今まで水害に三回遭っている。

一回目は小学五年生の時だった。ひどく雨の降る夜中に目が覚めたら、両親が玄関の土間に流れ込んでくる水をバケツで掻き出していたので驚いた。私の家は川のそばではないが、裏手が緩やかな斜面になっており、家の脇には雨水が流れる小さな水路があった。そこが溢れて床下に水が流れ込んできたのである。

翌日学校へ行くと、校舎の裏に大量の水が溜まっていた。学校の前と後ろにある小川が溢れたのだ。ピーク時には昇降口周辺の床上まで水が来たようだったが、そこはもうすっかり水が引いていた。

二回目は高校三年生の時だった。ある日の下校時、土砂降りの中を下宿に帰る道で、アスファルトに大きな水たまりができていたのが印象に残っている。

明るく朝起きてみると、私の下宿はなんと床下浸水になっていた。玄関のたたきに水が溜まり、もう少しで上がりかまちに達しそうだった。床上まで水が来たら二階（私たちの下宿部屋）に上がらせてもらうから、と大家さんに言われていたが、何とかぎりぎりのところで持ちこたえてくれた。下宿の裏手に広がる田んぼは、遙か彼方まで水没し、まるで大きな湖のようだったのをよく覚えている。そこをカメヤヘビが泳いでいるのを見た。ラジオで市内の学校が臨時休校になったのを知り、けしからぬことに一瞬喜んだ記憶がある。

休校措置が終わって登校したら、学校周辺の家々の前には濡れた畳が何枚も立てかけてあった。気の毒なことだった。私たちの期の卒業アルバムには、学校の昇降口が水没している写真が混じっているのだが、あれはだれが撮ったのだろうか？

三回目は大学三年生の時だった。夏休みに大学の友人が四人、私の生家に三泊四日ほどの予定で遊びに来たことがある。彼らが帰ることにしていた日の前夜から急に雨がひどくなった。翌日はバスが運休になってしまい、友人たちは帰る予定を延期せざるを得なくなった。

雨が小降りになった昼前ごろだったと思う。私たちは縁側のそばで暇つぶしにトランプをしていた。その時、たまたま庭に出ていた母が「あ、あ、あああ…」と素っ頓狂な声を上げた。そして、そのすぐ後に「どーん…！」という音がした。私の家の二軒向こうにある叔母の家で、裏の崖が崩れたのだ。母は、崖の上の木々が左右に揺れたかと思うと、たちまち崖が崩れ落ちたその瞬間を目の当たりにしたのだという。急いで叔母の家へ行ってみると、家の中央にある玄関周辺がせり出し、家全体が「く」の字状に変形していた。玄関から出てきた叔母が、「また崩れるかも知れないから、離れなさい！」と、様子を見に来た私たちに大声で叫んだ。

後でわかったが、叔母の家は裏手の部屋に大量の土砂がなだれ込んでおり、後日、県知事が

視察に来たほどの激甚災害なのだった。

いま言った水害はいずれも、「線状降水帯」などという言葉を目にするのがなかったころの話である。このごろでは、私が体験したものとは比べものにならないようなすさまじい豪雨災害が各地で頻繁に起こっている。その一因が地球の温暖化にあり、それをもたらしているのが私たち人間の活動なのだと思えば、自然災害の一部は人災的要素含んでいることになる。なんとも悩ましいことだと思う。

#### ミニエッセイ 4

### 思い出の(?) コート

近畿双松会に関わりを持つようになってから間もないころのこと。ある年の総会・懇親会の後、十数人ほどで飲み屋に行った。私は松本会長（当時）に誘われてメンバーに加わったのだが、場所は梅田の地下街にある居酒屋で、「近畿双松会御用達」のような店らしく、その日は貸し切り状態だった。店を切り盛りしていたのは私と同郷の女性（隠岐出身。ただし生まれ育った島は別。ちなみに松江女子高卒）で、そこに行きつけのメンバーは彼女と親しげに話をしていたようである。

学生を含む若い人から、かなり年配の方までの、幅広い年齢層が集まっていた。私にとってはほとんどが初めてお会いする方で、お名前もお顔も一部の人しか覚えていないし、どなたと何を話したかも今ではおぼろげになっている。

ひとしきり飲んだころ、遠方から来られた方が帰り始めた。それを見て、京都市の北の外れに住んでいる私も引き上げることにした。寒い季節ゆえ誰もがコートを着て集まっており、それは店の片隅のコート掛けにぎっしり吊されていた。それをかき分けながら自分のコートを探し出して着ると、私は「お先に失礼します」と挨拶し、JR 大阪駅から帰途についた。

けっこう飲んだ後だったので眠たかった記憶がある。ボックス席の窓側で、からだを窓の方にもたせかけながら、何気なくコートポケットに手を入れた。すると、何やら覚えのないものが手に触れた。取り出してみるとハンチング帽である。

誰かが間違えてわたしのコートに帽子を入れたらしい。ちょっと困ったことになった。どうしたものか…。

しかし、酔った頭ではよい考えが浮かばなかった。

明るく朝、パジャマから服に着替えるためクローゼットに入り、昨夜のコートが掛かっているのを見た時、そこはかたなく違和感を覚えた。いつも見るより色が濃い感じがする上、緑っぽく見える。すぐに着てみた。すると、妙に丈が長いのである。ん…？

そこでようやく気がついた。飲み屋で誰かのコートを間違えてしまったことに。昨夜ポケッ

トの中にハンチング帽があるのに気づいた瞬間、とっさに浮かんだ考え——“誰かが間違えて私のコートに帽子を入れた”——が、あまりにも自己中心的発想だったと思い知り、恥ずかしくなった。

それからあわてて松本会長に電話をし、事情を話した。昨夜、私にコートを間違えられた人が誰なのかがわかるかもしれないと思ったからである。

詳細は省く（というよりも忘れた）。結論から言うと、その人物はすぐに判明した。Mさんという大先輩だった。さいわい、昨夜顔を合わせた記憶はあった。私は、松本会長に教えていただいた番号に電話して M さんに謝罪し、すぐにコートを送るので住所を教えていただきたいとお願いした。すると M さんはこうおっしゃった。「そういう方法もあるけど、それよりどこかで落ち合って飲もうや」

数日後、私たちは京都の三条京阪で待ち合わせをした。地下にある改札口に向かって階段を下りる時、一足先に到着しておられた M さんが目に留まったが、私より体格のいい M さんがまとった私のコートはいかにもちんちくりんなのである。わたしは改めて申し訳ないと思った。

私たちはコートを交換すると、三条京阪からほど近い先斗町に行き、その中でもなるべく庶民的な店を選んで入り、しばし楽しく飲んだ。

同窓生というのはいいものだ。しみじみそう思った。